

保育実習経験による保育者観と子ども観の変化の検討

—教員養成課程の学生との比較を通して—

Examination of changes in childcare view and child view due to childcare training practice

—Through comparison with students in the teacher training course—

毛利 泰 剛
Yasutaka Mohri

I 問題と目的

子育てや教育に対して世の中の関心が向けられる中、幼稚園教諭及び保育士（以下、保育者）に対する社会的需要は強くなり、実際の職務においても幅広い内容が求められている。特に現場の実情として幼稚園・保育所の中だけでの子どもの保育に関わればよいというものではなく、地域や家庭との連携において子育てを考えることが必須となってきている。現代において、保育者ははたまた単に子育てをする仕事ではなく、高い専門性が必要とされている。そのため高い技術と人間性を備えた保育者の育成がより一層社会的ニーズとして求められている。

保育者養成課程ではそのニーズに応えるため、理論と実践を兼ね備えたカリキュラムを構成している。その中でも、実際に現場に出て実習を行う保育実習は保育者養成校の中心科目となっているため、保育実習の意義については教育学的、心理学的に様々な研究がなされている。実際、保育者養成課程の学生（以下、保育学生）は幼稚園や保育所での実習を経験し、子ども観の変化だけでなく、同時に自分自身の保育者観も獲得していくことになる。

そこで、毛利（2018）は実習を経験することによって、実際に幼児の遊びを観察することによって遊びの概念が変化し、子ども観が変化するのかどうかを調査した。その結果、実習前後の遊び概念のイメージは幼児との関わりの中で変化していくことがわかった。し

かし、子ども観については、保育学生は実習前からすでに確固たるものをもっており、実習による大きな変化は見られなかった。

では、実習では変化が見られなかった保育学生の子ども観は、どのように形成されているのであろうか。

ある一定の子ども観の獲得は保育者の必須条件である（星野・石橋・藤本・松田，1995）ことからすると保育者の資質となる一つであると考えられる。ということは、保育学生の子ども観は保育学生がもともと持っている資質の一つということであろうか。もし、子ども観が保育学生のもともと持ちうる資質であるならば、保育者志望でない同年代の学生との間には、違いが見られると考えられる。そこで本研究では、保育学生の保育者としての資質を検討していくために子ども観、遊びイメージを同じ学年であり、保育実習等を経験していない教員養成課程学生と比較検討することによって保育学生の子ども観を明らかなものにしていく。なお、保育者としての資質となるものは、子ども観だけではない。そこで、その資質の一つと考えられる「保育者としての信念」と「保育者効力感」においても教員養成課程学生と比較し、保育学生の保育者としての資質を検討する。

II 方法

調査対象

・短期大学保育者養成課程の1年時（実習前）X年

12月の講義 123名（男性5名 女性118名）

・実習終了後の2年時（実習後）のX+1年10月の講義（「保育者としての信念」と「保育者効力感」を調査。）対象者は毛利（2018）の調査と同じであるが、この調査（2年時）で未回答があった2人を除いた。

・四年制大学の講義（2年時開講）を受講している教員養成課程の学生 127名 X+1年10月の講義（男性47名 女性80名）

教員養成課程の大学生（以下、教員養成課程学生）については四年制大学で開講されている心理学系の講義（2年時開講）を受講している学生を対象に調査した。この講義は心理学の専門科目と同時に教員免許取得に関連するための科目となり、小学校教員を目指す者、中学校、高等学校教員を目指す者も多く含まれている。ほとんどの学生が教育養成の学部所属しているため、子どもに対する好意（子どもは好きか。の5段階評定）の調査においてはほとんどの学生が好意傾向にあり、保育学生との有意差は見られていない。また、調査対象の学生は小学校及び中・高等学校における教育実習及び観察実習を経験していない段階である。

調査方法 質問紙調査

・質問紙について

「子ども観」と「遊びイメージ」については、毛利（2018）で使用したものをそのまま引用した。

「保育者としての信念」と「保育者効力感」については以下の通りである。

・「保育者としての信念尺度」

Deborah, J.Stipek and Patricia, Byler (1997) による教師信念尺度を用いた。この尺度は子どもへの関わり方及び指導の仕方として、教師中心に指導方法考える基礎知識方針尺度（Basic Skills Orientation Belief Scale、以下 Basic Skills）と子どもの認識を中心とした方針の尺度（Child-Centered Orientation Belief Scale、以下 Child-Centered）がある。

・「保育者効力感尺度」

三木・桜井（1998）が教師効力感尺度をもとに作成した保育者効力感尺度を用いた。教師効力感は、「個人的な教授効力感」である、教師個人が子どもの学習によりよい影響をもたらすことができるという信念と、「一般的な教授効力感」である、教師という存在

が子どもたちによりよい影響をもたらすことができるという信念とに分けられている。この「一般的な教授効力感」は「個人的な教授効力感」に影響を及ぼすかもしれないが、それ自体が個人における「自己」に関する効力感ではない。そこで保育者効力感尺度は教師効力感尺度における「個人的な教授効力感」に基づいて作成されている。

保育学生に対して毛利（2018）において調査した①「子ども観・概念体系」、②「子ども観・価値体系」、③「具体的な遊びについて」、④「遊びに対するイメージ」に加えて、同じ時期に⑤「保育者としての信念（26項目）」、⑥「保育者効力感（10項目）」について質問紙により調査した。同様に、同時期に講義を受講していた教員養成課程学生に対して、上記①～⑥の項目について調査した。

Ⅲ 結果と考察

まず、実習前の保育学生と教員養成課程の学生と①「子ども観・概念体系」の6因子、②「子ども観・価値体系」の4因子、③「具体的な遊びについて」の4因子、④「遊びに対するイメージ」の1因子のそれぞれの因子についての平均を比較した。

図1は①子ども観・概念体系の6因子の平均を表したグラフである。それぞれの因子において、教員養成課程学生と保育学生との間に違いが見られるかについてt検定を行った。その結果、すべての因子において保育学生と教員養成課程学生の間有意差が見られた。保育学生の方が高い因子として、可能性因子 ($t(258)=6.86, p<.01$)、あてになる存在因子 ($t(258)=4.64, p<.01$)、未熟な存在因子 ($t(258)=2.73, p<.01$)、理解可能な存在因子 ($t(258)=5.80, p<.01$) の4因子であった。一方で、否定的因子 ($t(258)=6.23, p<.01$)、一個の人間因子 ($t(258)=1.73, p<.01$) においては教員養成課程学生のほうが有意に高かった。

この結果、保育学生は子どもをより肯定的にとる傾向にあり、特に子どもの可能性や将来性を肯定的に理解しようとしている。このような結果は将来保育に関わりたいという意志が反映していると考えられ、保育学生のもつ資質の一つととらえることができる。一方で、教員養成課程学生は一人の人間として子どもを捉

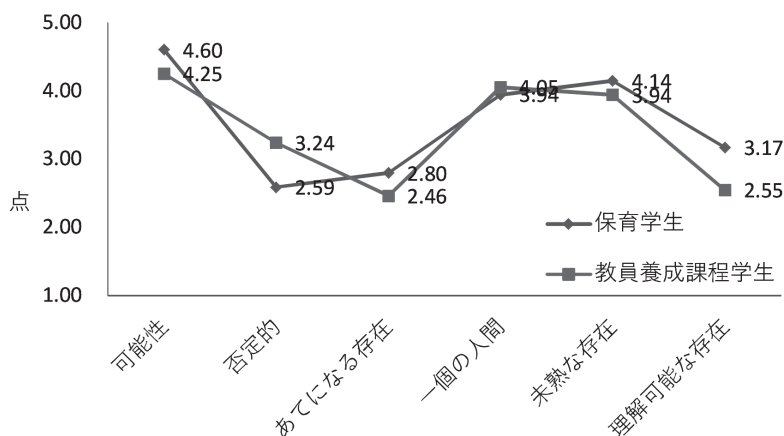


図1 子ども観・観念体系

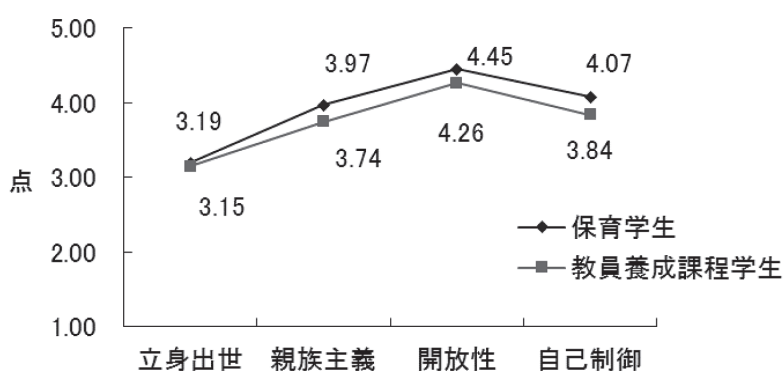


図2 子ども観・価値体系

えようとしている傾向があるといえる。

また図2は保育者養成課程（実習前）の学生と教員養成課程学生の②「子ども観・価値体系」の4因子の平均を表したグラフである。それぞれの因子においてt検定を行ったところ、立身出世因子においては有意差が見られなかったが、それ以外の親族主義因子 ($t(258)=3.60, p<.01$)、開放性因子 ($t(258)=2.84, p<.01$)、自己制御因子 ($t(258)=3.17, p<.01$) においてはそれぞれ保育学生の方が教員養成課程学生よりも有意に高かった。

親族主義が高いという点から、保育学生はより幼児にとって家族関係を大事にしていく必要性を感じていることがいえる。また、開放性が高いということからより幼児に多くの人との関わりを求めているといえる。そして、自己制御が高いことからより幼児には人のことを考える力を持っているということを期待しているといえる。つまり保育者は幼児に関わっていく職業を意識しているため、その幼児に対してよりはっきりとした将来像を期待していると考えられる。それぞれの期待は実際の幼児教育で期待されているものとい

える。幼児教育へ関心がある保育学生の子ども観として、入学時点から子どもの将来の価値をはっきりと意識していると考えられる。

図3は③「具体的な遊びについて」の4因子、④「遊びに対するイメージ」因子の平均を表したグラフである。それぞれの因子についてt検定を行ったところ、想像遊び ($t(258)=6.31, p<.01$)、創作遊び ($t(258)=7.79, p<.01$)、遊びイメージ ($t(258)=6.16, p<.01$) において有意差が見られた。しかし、ルール遊びと道具遊びについては有意差が見られなかった。「想像遊び」は保育学生の方が高くなっている。ごっこ遊びやままごと、泥遊びなどは実際によく遊ばれているもので、保育者養成課程の講義においても取り上げられることが多い。そのため、保育学生の方が「想像遊び」に触れる機会が多く、イメージしやすいのではないかと考えられる。「創作遊び」は、毛利(2018)の調査でもあったように、子どもと関わる経験をしていないと高い傾向を示している。よって保育学生よりも教員養成課程学生が高くなっているといえる。遊びイメージは保育学生が高くなっていることから保育学生は

実習に関わっており、毛利 (2018) において実習前後により変化が見られたことから実習の経験を踏まえた上で遊びをとらえていると考えられる。一方の教員養成課程学生は幼児に関わる実習を経験していない。鈴木 (1996) が自分の経験をもとに、幼児をとらえる傾向があると述べているように、幼児と関わる経験がないことから、主に自分自身の幼児期の経験を基にイメージが考えられているといえる。

このように、保育学生と教員養成課程学生では、子どものとらえ方に違いが見えてきた。では、子ども観や遊びの違いが保育者としての資質の違いにどのように関連してくるのであろうか。

そこで、保育学生と教員養成課程学生の⑤「保育者としての信念」、⑥「保育者効力感」について比較した。なお、この⑤「保育者としての信念」、⑥「保育者効力感」については、全ての実習後の2年時の時期にも調査した。

図4は保育者の信念、及び効力感の平均を表したものである。まず、⑤「保育者としての信念」において、

Basic Skills と Child-Centered それぞれの尺度について、1 要因 3 水準（保育者養成課程の1年時、保育者養成課程の2年時、教員養成課程学生）の分散分析を行ったところ、有意差が見られた (Basic Skills $p < .01$ Child-Centered $p < .01$)。多重比較を行ったところ、いずれも1年時と2年時には有意差が見られなかったが、1年時と教員養成課程学生 ($p < .01$)、2年時と教員養成課程学生 ($p < .01$)の間には有意差が見られた。教員養成課程学生は Basic Skills の方が有意に高く、保育学生は Child-Centered の方が有意に高かった。つまり、保育学生は子どもの主体性を考えた指導を考えており、教員養成課程学生は、指導要領に沿って指導を行う考え方があるということになる。小学校教育以上においては、学習指導要領に基づく指導を基本としているため、このような結果になったと考えられる。

また学生 (3 : 保育者養成課程の1年時、教員養成課程学生、保育者養成課程2年時) × 信念 (2 : Basic Skills、Child-Centered) の分散分析を行った

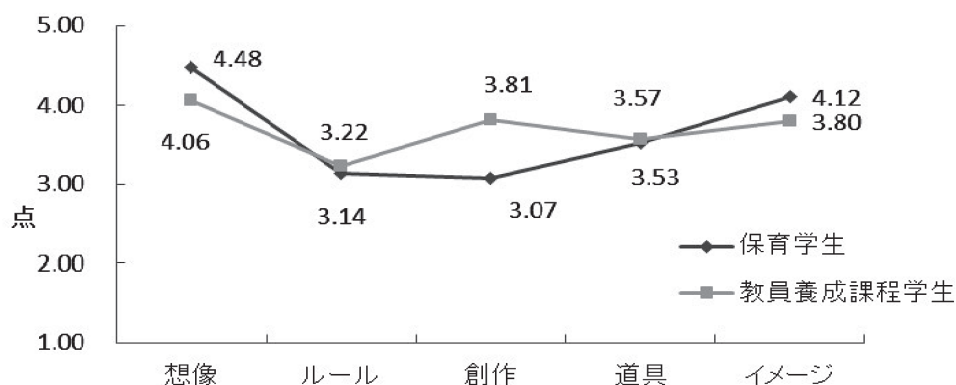


図3 具体的な遊び・イメージについて

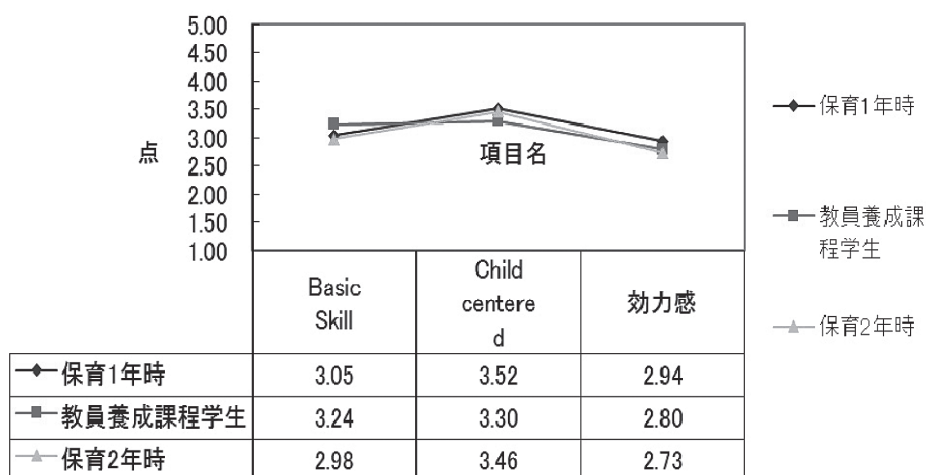


図4 保育者信念及び効力感

ところ、学生間において有意差が見られた。(p<.01)。つまり、保育学生の信念は教員養成課程学生の信念は違うことがいえる。

では保育学生と教員養成課程学生では、Basic Skills と Child-Centered の信念についてどちらを中心に考えているのであろうか。それを検討するため、保育学生1年時と教員養成課程学生をそれぞれの尺度について2つのクラスターに分類した。

保育学生において、図5に見られるようにクラスター①はChild-Centeredの値が高くなっており、クラスター②ではBasic Skills と Child-Centered が同程度であった。それぞれの交互作用をみると、クラスター①とクラスター②ではBasic Skills と Child-Centered の間にいずれも有意差があり、またBasic Skills と Child-Centered においてもクラスター①とクラスター②の間に有意差が見られた(いずれもp<.01)。そのため、クラスター①とクラスター②に有意に分類できたことがいえる。

また図6に見られるように教員養成課程学生のクラスターは、クラスター①はChild-Centeredが

高くなっており、クラスター②はBasic Skillsのほうが高くなっている。それぞれの交互作用をみると、クラスター①とクラスター②ではBasic Skills と Child-Centered の間にいずれも有意差があり、またBasic Skills と Child-Centered においてもクラスター①とクラスター②の間に有意差が見られた(いずれもp<.01)。そのため、クラスター①とクラスター②に有意に分類できたといえる。

そこで、保育学生と教員養成課程学生のクラスター①においてChild-Centeredが高く、Basic Skillsが低いことから、子ども中心指導群とした。また、クラスター②においては保育学生においてもChild-Centeredが高くなったことから、子ども中心指導ではない群(それ以外)とした。

表1は保育学生と教員養成課程学生のそれぞれのクラスター(子ども中心指導群とそれ以外)に属する人数に分け、 χ^2 検定をおこなったものである。その結果、保育学生と教員養成課程学生の間において、教員養成課程学生の方が有意に子ども中心に関わり方を考えていく人の割合が多いということがわかった。つま

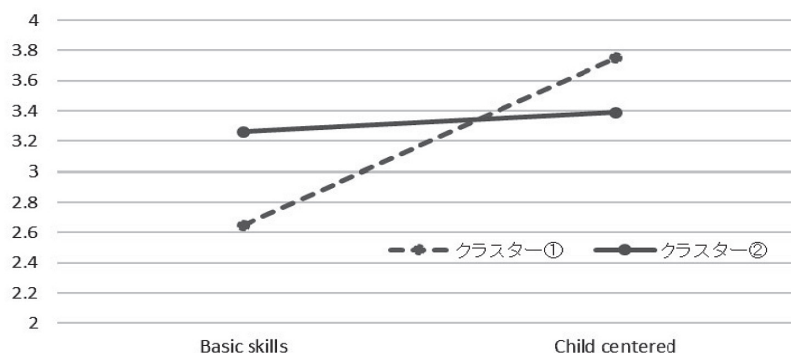


図5 信念クラスター分け (保育学生)

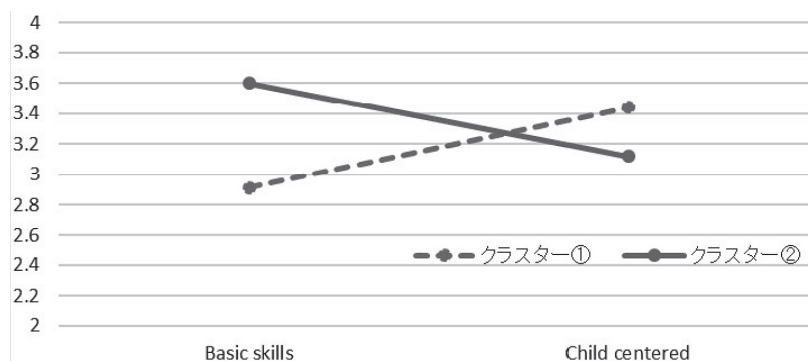


図6 信念クラスター分け (教員養成課程学生)

表1 保育学生と教員養成課程学生のクラスターごとの人数

	子ども中心	それ以外	計
保育学生	49(19.6%)	74(28.4%)	123(49.2%)
教員養成課程学生	71(28.4%)	56(22.4%)	127(50.8%)
	120(48%)	130(52%)	250(100%)

$\chi^2(df=1) p=.011$

り、保育学生は実習により実際に指導に携わったことなどから、子どものとらえ方だけではなく、教える立場としての指導の仕方というものをより考えているのだといえる。

次に、図7にある⑥保育者効力感について検討した。効力感の高さについて1要因3水準（保育学生1年時、教員養成課程学生、保育学生2年時）の分散分析を行ったところ、有意な結果が見られた（ $p < .01$ ）。そこで多重比較を行ったところ、教員養成課程学生と保育学生の間には学年を問わず、有意な差が見られなかったが、保育学生1年時と2年時の間では、1年時の方の効力感が有意に高いことがわかった。効力感の質問項目は「子どもにわかりやすく指導することができると思う」や「1人1人の子どもに適切な遊びの指導や援助を行えると思う」といった、実際に幼児の前に立って関わっていくことができるかを聞いているため、自分が実際に保育者として幼児の前に立てる自信を示している。つまり、保育学生の2年時は保育学生の1年時に比べて保育者としての自信が低くなっているということになる。2年時は2年間実習や現場の関わりを繰り返していることから、現実を知り、また社会に出て保育者になる直前という不安から自信が低下しているのだと考えられる。1年時と教員養成課程学生の間には有意な差が見られないことから、実習を経験していく前には、それなりの自信とい

うものを持っているが、実習もしくは保育者養成の課程によって低下しているのだと考えられる。つまり保育者効力感は保育者を志望とする学生のもともとの資質とは言えず、逆にある程度持っていた自信が、実習、もしくは保育者養成の課程によって減少していると考えられる。志望した当初にもっていた保育者の理想が実際に現場に関わることによって現実のものになっていくため、自信が低下していくのは納得できる。しかし、保育者効力感も三木・桜井（1998）の研究で明らかになっている通り、保育者の資質として考えることができるので、この効力感の減少は現在の保育者養成カリキュラムの課題が表れている結果ともとれる。

IV 総合考察

本研究は保育者養成校において、保育実習を中心とした保育者養成カリキュラムが与える影響と、保育学生の資質の獲得について教員養成課程学生と比較しながら検討するものであった。

本研究では保育学生の意識調査として、子ども観（概念体系と価値体系）、遊びイメージ（遊びの内容、イメージ）、保育者としての信念、保育者効力感を保育学生の意識として調査した。保育学生の特徴として、まず自分なりの保育者に対してのイメージと保育者になるという意思を持っていることがあげられる。自由記述法（回答は任意）で保育者になりたい理由を質問したところ、ほとんどの学生が「子どもが好きだから」「先生や保育者だった親にあこがれたから」という理由が挙げられていた。また、ほとんどの学生がボランティアや職場体験によって、自ら望んで子どもと触れる機会をもっていた。

小泉・田爪（2005）は保育職志向が強く、幼児を今

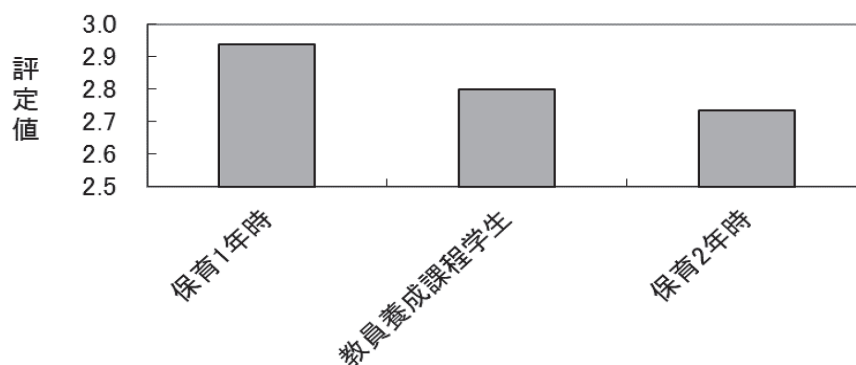


図7 保育者効力感

あるがままに受け止めていく幼児需要型であることによって保育者としてアイデンティティを獲得できると述べている。小泉ら（2005）の結果にも出ているように、子どもと接する機会をもち、子どもが好き、つまり子どもを自分なりの概念でとらえたからこそ、保育者としての道を選んでいるのだといえる。その中で、保育者養成カリキュラムの中で指導や理論を学んでいくことによって、「子どもがかわいい」という概念の中でも、自分が保育者としてどのような立場であるべきかを考え、保育者としての信念を獲得していくことになっているのだと考えることができる。

保育学生は確固たる子ども観をもっており、それは実習でも変化は有意に見ることができなかつた。しかし、遊びのイメージに変化が見られたように、実際に子どもを見ることで子どものイメージの要因は少なからず変化する。また、「保育者になる」という意識を「保育者になれる」という意識に変化していくために実習を中心としたカリキュラムは必須であろう。実際に、自由記述にほとんどの学生が一番つらいこととして、幼稚園実習では指導案作り、保育実習では日案づくりを挙げていた。実際に保育者としての立場として、指導を意識し、自分の指導感に実習現場の指導感を組み合わせることで、現場の実情を体験し、保育者としての信念を獲得していくのだろうと考えられる。保育者養成課程において保育実習を中心としたカリキュラムが組まれているのはこのことが一つの要因に挙げられるだろう。

ただし、同時に現在の保育者養成カリキュラムには課題もあることがわかった。確かに実習を行うことで、現場に触れ、幼児に触れ、保育者としての仕事を自分のものにしていくことが求められる必須条件であるが、それと同時に保育者としての自信が獲得できていない状況が見られる。そのため、個人差や各実習校の方針もあるだろうが、保育学生に自信を持たせることのできる実習の内容、もしくは実習に関連させた講義についても検討していくべきであろう。

V まとめと今後の課題

本研究では毛利（2018）で行った保育実習生の1年間の変化をとらえた縦断的な研究に加えて、教員養成

課程学生との比較をすることによる横断的な研究によって、保育学生の保育者としての資質の獲得について検討してきた。その結果、保育学生による保育者としての資質とその獲得について、実習というカリキュラムを通しながら検討していくことができた。

しかし、本研究の目的から言えば、保育者を縦断的に見ていき、保育者養成カリキュラムと保育者としての資質を結び付けていく必要があるといえる。縦断的な変化を見ていくにあたって、保育者としてのアイデンティティを実習によって獲得できない学生もいる（小泉・田爪，2005）という結果もあるように、学生によっては実習が大きな意図を果てしていないことや実習によって保育者としてのイメージが立たずに進路を変える学生もみられる。今後は個別の事例検討や変化を見ながら、保育者養成課程における保育実習や教育実習の意義や課題を見ていくことも必要だと考えられる。

VI 引用文献

- Deborah, J. Stipek and Patricia, Byler (1997). Early childhood education teachers: Do they practice what they preach? *Early Childhood Research Quarterly*, 12, 305-325
- 星野英五・石橋尚子・藤本逸子・松田憲治（1995）. 保母養成カリキュラムの基礎的研究—学生の子ども観・保育者観形成に関する三大学間比較を中心に— *保母養成研究* 13, 79-88.
- 石川正子（2015）. 保育学生がもつ子ども観 *盛岡大学短期大学紀要* 25, 1-7.
- 嘉数朝子・喜友名静子（1998）. 保育科短大生の「子ども観」尺度に関する研究Ⅱ *日本保育学会大会研究論文集* 51, 812-813.
- 岸本肇・勝木洋子（2002）. 青年女子層の遊び体験に関する研究—幼児教育専攻学生に対する調査をもとにして— *神戸大学発達科学部研究紀要* 9, 2, 29-37.
- 北島茂樹（1989）. 現代っ子の遊びに関する心理学的研究 [IV]—五歳児の遊びについての調査分析から、伝承遊びを中心に— *九州龍谷短期大学紀要* 35, 353-385.
- 小泉裕子・田爪宏二（2005）. 実習生の保育者アイデンティティの形成過程についての実証的研究—保育者モデルの影響と保育者アイデンティティ「私は保育者になる」の関連— *鎌倉女子大学紀要* 12, 13-23.
- 三木智子・桜井茂男（1998）. 保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響 *教育心理学研究* 46-2, 203-211.
- 森上史郎・高杉自子・柴崎正行（編）（1999）. *幼稚園教育要領解説 フレーベル館*
- 毛利泰剛（2018）. 保育者養成課程における学生の実習経験によるイメージ変化の検討—遊びイメージと子ども観について— *福岡女学院大学紀要* 第19号人間関係学部編 31-38.

鈴木隆男 (1996). 保育者志望時期と Identity 得点の関係
保母養成研究14, 13-19.
渡部努・嶋崎博嗣 (2004). 保育者の保育者効力感と心理社

会的要因に対する過去の遊び経験の影響 日本保育学
会大会研究論文集 57 192-193.